百済における地方の軒丸瓦について
—扶安「古青林寺跡」出土瓦を中心として—

李　다운（タウン）

はじめに
Ⅰ．地方の軒丸瓦
Ⅱ．扶安古青林寺跡の軒丸瓦
Ⅲ．考　察
おわりに

はじめに

百済の瓦の研究や発掘調査は、これまで都であった現在のソウル市・扶餘郡・公州市、そして別都であった益山市を中心に行われてきた。地方[1]の瓦については資料が不十分であったこともあり、なかなかその様相を把握することが難しかった。

近年、地方においても百済時代の瓦が出土する遺跡は増加しているものの、まだ生産年代をはじめ、生産背景や展開過程など、全体の様相については明らかになっていない。

地方における瓦の生産・使用のあり方と、その背景について検討することは、百済の中央と地方の歴史を明らかにする上でも重要であろう。

本稿ではその一歩として地方の瓦の中でも最も重要な軒丸瓦を対象とし、特に1996年、圓光大学校馬韓・百済研究所が発掘調査した全羅北道扶安郡上西面に位置する古青林寺跡から出土した瓦を中心に検討したい。

Ⅰ．地方の軒丸瓦

現在、百済時代の地方の軒丸瓦が出土した遺跡は約13ヶ所に及ぶ。しかし、採集品が多く遺物の信憑性や遺跡の性格が分からない所も多い。本稿では発掘調査が行なわれたり、出土地が明らかな資料のみを取り扱うことにする。

（1）百済烏含寺跡（聖住寺跡）（第2図）

忠清南道保寧市聖住面聖住里に位置する百済烏含寺[2]は『三國史記』や『三國遺事』に百済滅亡を暗示する記事の中で登場し、同様の内容が『日本書紀』にも記され、古くから注目されてきた。

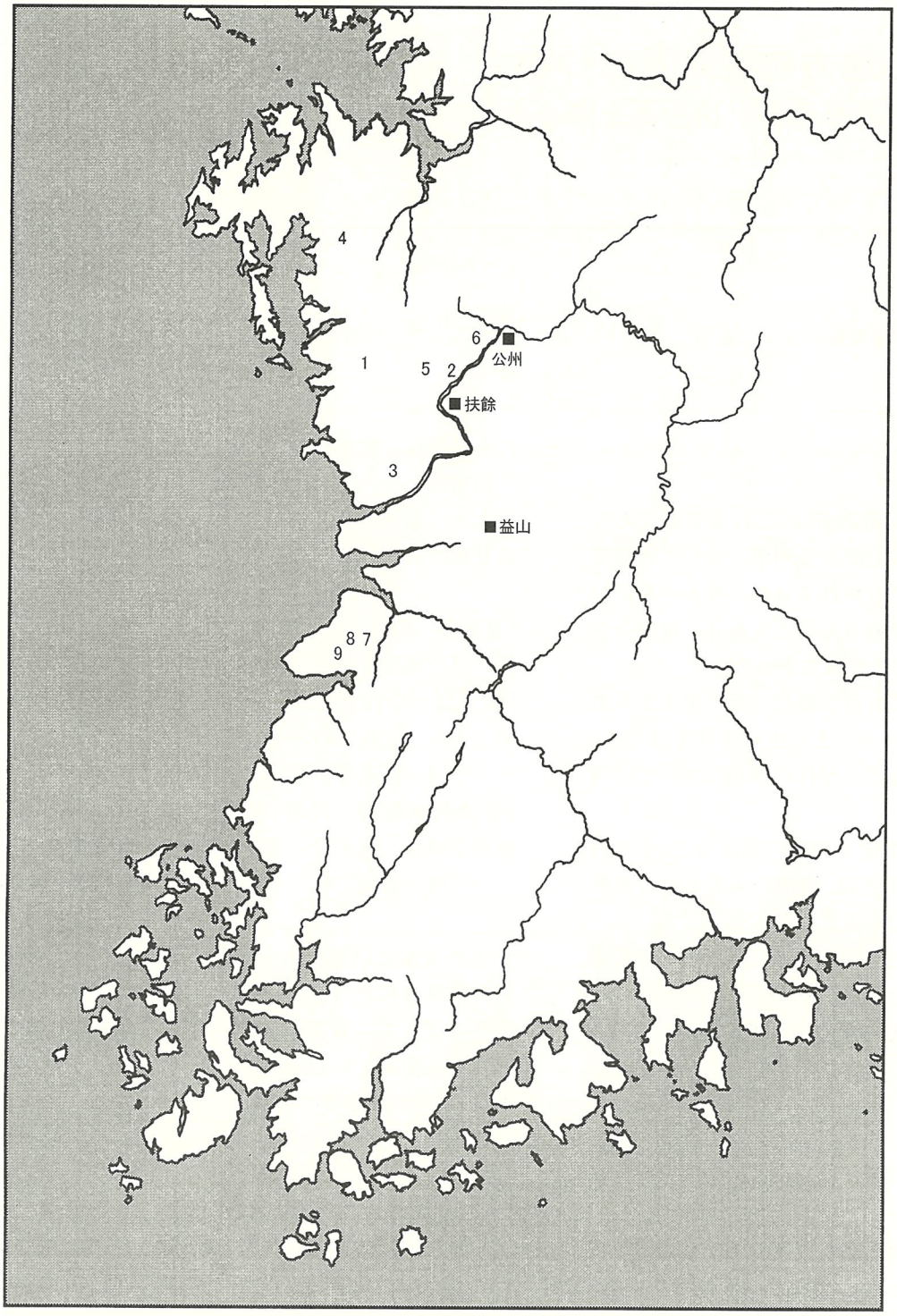
同遺跡から出土した軒丸瓦については筆者の論考があり（李タウン 1999a）、その内容を簡略に要約すると次の通りである。

「夏五月　騂馬入北岳烏含寺　鳴匝佛宇數日死」
『三國史記』巻二十八　義慈王十五年条（655）
「現（顯）慶四年己未　百濟烏會寺（亦云烏合寺）有大赤馬　晝夜六時遶寺行道」
『三國遺事』巻一　紀異第一　太宗春秋公条
「百濟伐新羅還　時馬自行道於寺金堂　晝夜勿息唯食草時止　或本云　至庚申年爲敵所滅之應也」
『日本書紀』巻二十六　齊明天皇四年条（658）

上の文献に創建年代や所在は記されていないが、近年発見された『崇巖山聖住寺事跡』・『聖住寺碑文』によって（黄壽永 1968・1981）、扶餘から西北西に直線距離で約25km離れた地点に所在した聖住寺跡の前身が、烏含寺であったことが明らかになり[3]、創建年代も推定可能になった。

「聖住禪院者本隋煬帝大業十二年乙亥　百濟國二十八世惠王子法王所建烏合寺　戰勝爲寃魂願昇天界之願刹也　時藍浦羣賊　起刦令伙　俱（但）存第屋可（也）」
『崇巖山聖住寺事跡』
「百濟國獻王太子・・・」
『聖住寺碑』碑片

『崇巖山聖住寺事跡』には創建年代を「大業十二年乙亥」、創建者を「惠王子法王」と記されている。しかし、「大業十二年」（616）の干支は「丙子」で



1　百済烏含寺跡
2　往津里窯跡
3　金徳里窯跡
4　修徳寺
5　冠峴里瓦窯跡
6　本義里窯跡
7　遇金山城
8　新青林寺跡
9　古青林寺跡

第１図　遺跡分布図

あり（「乙亥」＝615年）、また、616年は法王ではなく武王代（600～641）であるなど、いくつかの問題点はあるものの、烏含寺の性格を考慮すると、法王が599年に太子の身分として草創し、武王時代の616年に落成したと考えられている（李道学1989）。

忠南大学校博物館の発掘調査（1991～1996）によって出土した百済烏含寺跡の創建瓦141点は素弁軒丸瓦（ＩＡ・７種類）と有稜線文軒丸瓦（ＩＢ・５種類）に大別できる。ＩＡが約25%、ＩＢが約75%を占めているが、これらの軒丸瓦とセット関係を求める丸・平瓦も大きく２つに分けられるので、ＩＡを生産した造瓦集団を１群、ＩＢを生産した造瓦集

団を２群と呼ぶことにする。

そして軒丸瓦をはじめ丸・平瓦の製作技法や周辺の遺跡から出土する瓦を比較検討した結果、次のようなことがわかった。

１群は最初に官の指導を受けたが、後に在地の瓦工人が主体となり、２群は土器工人まで造瓦集団に編成させたと考えられる。両者の造瓦活動の時期は１群が599年～７世紀初頭、２群が７世紀第一四半期と推測される。しかし、補修用瓦の存在を前提とすると、２群の瓦の一部は７世紀第一四半期を下る可能性も十分考えられる。２群の軒丸瓦は、他の遺跡から出土しないので、比較検討することは難しいが、文様構成や出土量からＩBc・ＩBeが補修瓦として製作された可能性がある。

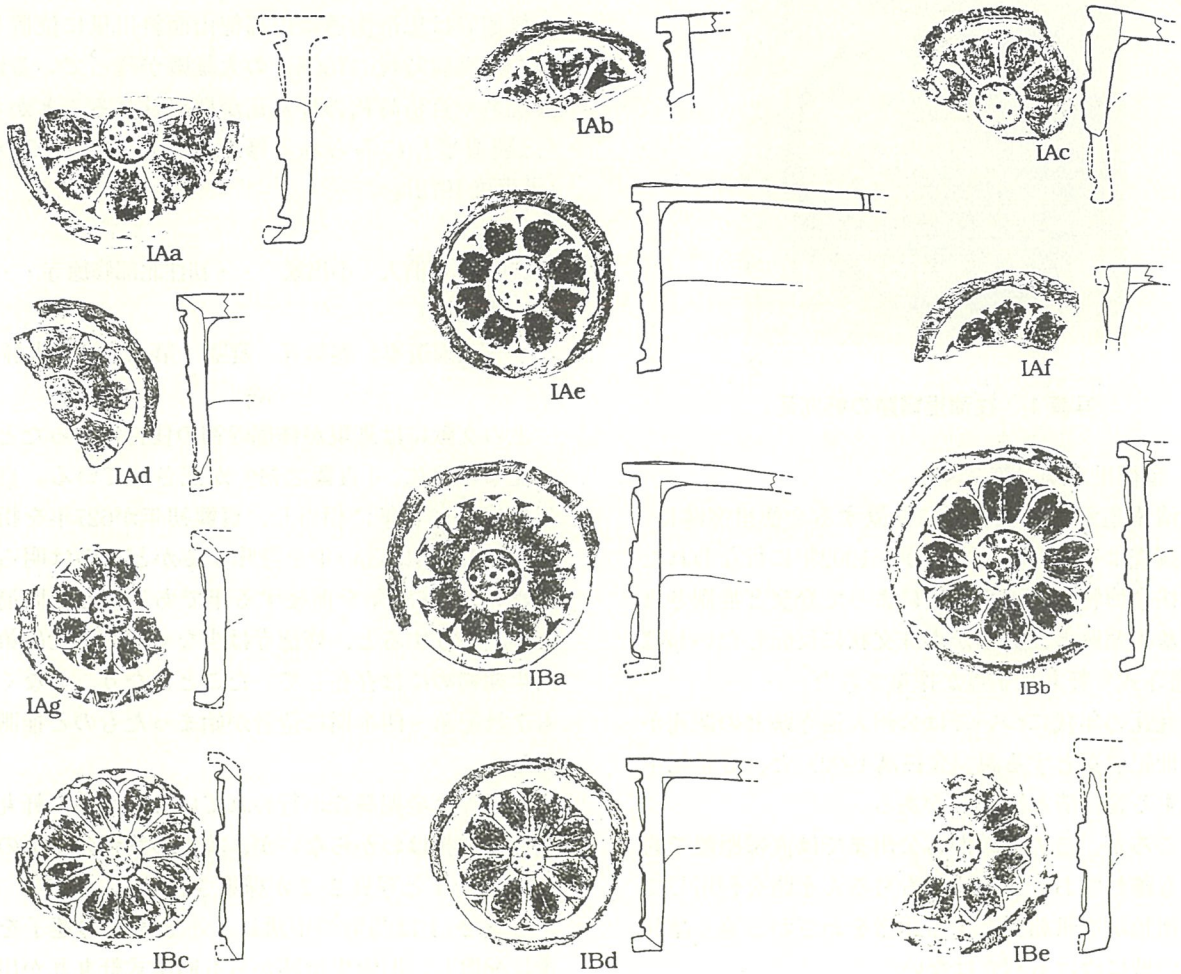
烏含寺は創建の事情[4]が文献に記された数少ない寺跡の一つであり、百済王が建てた寺院としては王宮や別宮の周辺ではなく、地方に建てられた唯一の寺院である。

（２）往津里窯跡（写真１）

忠清南道青陽郡青南面に位置する往津里窯跡は錦江に面しており、瓦の運搬に適した立地条件をもそなえる。この遺跡は数十基の窯跡が密集した大規模な窯跡群と推定されているが、そのほとんどが急流や洪水によって流失し、階段式登窯５基と平窯１基だけが調査された。その中で全体の大きさが分かる第３号登窯は、全長6.7m、幅1.8mで、全長は亭岩里窯跡より長い（金誠亀1990）。

この窯跡は瓦の他に土器片が多量に出土する瓦陶兼業窯である。軒丸瓦は飛鳥寺の花組の文様に似た桜花形花弁をもつ軒丸瓦（写真１-１）と、文様を持たない素文軒丸瓦（写真１-２）が出土している。

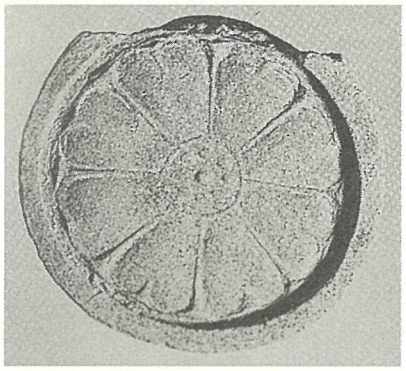
前者は文様構成から６世紀後半に推定されるが、需給関係はまだ分からない。しかし、同形式のものが扶餘官北里推定王宮跡をはじめ、泗沘都城内の多くの遺跡から出土するので、泗沘都城が主な供給先であった可能性が高い。後者は扶蘇山城に供給され



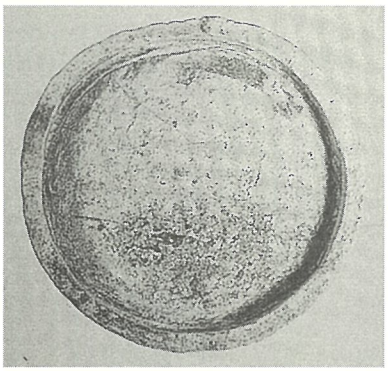
第２図　百済烏含寺跡の軒丸瓦（1/6）

ており、供給時期は７世紀前半と推定される。

1971年の緊急調査ということもあって、遺構や出土遺物の様子が明らかにされていないので、操業時期や需給関係も明らかではないが、上の二つの軒丸瓦より、少なくとも６世紀後半～７世紀前半には操業が行われ、泗沘都城の複数の遺跡を供給先としていたと推測される。[5]



1



2

写真１　往津里窯跡の軒丸瓦

（３）金徳里窯跡（第３図）

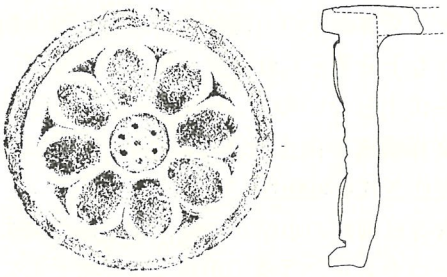
忠清南道舒川郡板橋面に位置する金徳里窯跡は、発掘調査は行われていないが、1992年に行なわれた国立扶余博物館の地表調査によって登窯と推測される２基の窯跡と、弁端が点珠文状に反転したいわば「大通寺式」軒丸瓦１点が採集された。

軒丸瓦の年代については公州大通寺跡との関連から６世紀前葉とする説（金鐘萬1992）と、６世紀中葉とする説（清水2003）がある。

ところが、この遺跡から公州までは直線距離で約50kmも離れており、陸路はもちろん水路を利用しても公州地域を供給先とする瓦窯をわざわざ遠く離れたこの地に設ける利点はない。

金徳里窯跡と同笵関係が求められる軒丸瓦は扶餘地域の旧衙里遺跡・陵山里寺跡・龍井里寺跡・官北里遺跡からは出土しているものの、公州地域からは出土していない（清水2003）。

今後の発掘調査の結果を待たなければならないが、金徳里窯跡は大通寺跡の瓦工人の系統を引くものの、泗沘遷都と共に移動、もしくは分派してきて泗沘都城を主な供給先としたものと考えておきたい（李タウン2002a）。



第３図　金徳里窯跡の軒丸瓦（1/4）

（４）修徳寺（写真２）

修徳寺[6]は忠清南道禮山郡德山面斜川里に位置し、現在は高麗時代（1308）の大雄殿が残っているが、寺院名や百済時代の軒丸瓦が採集されることから、『三國遺事』にみられる修徳寺に比定されている（洪思俊1972）。

「釋惠現　百濟人　小出家・・・初住北部修德寺・・・卽貞觀之初」

『三國遺事』卷第五　避隱　第八　惠現求靜条

上の文献には惠現が修徳寺初の住持になったという記事の後に、「貞觀之初」が記されている。貞觀年は627～649年に相当し、貞觀初年が627年を指すのか、627年に近い年を意味するかどうかは明らかでないが、630年を前後する年であることは間違いない。そうすると、修徳寺は少なくとも７世紀第二四半期初めには存在していたことになり、少なくとも７世紀第一四半期に造営が始まったものと推測される。

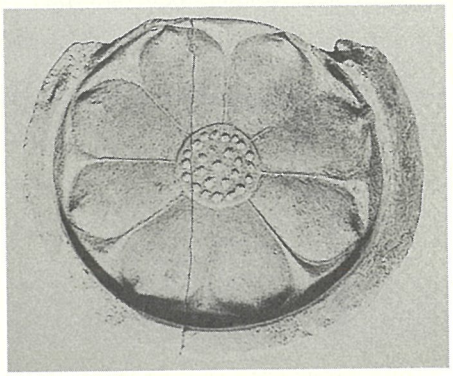
修徳寺は発掘調査が行われていないため、軒丸瓦全体の様相はわからないが、境内の築台の工事の際に写真２-１と写真２-２が採集された。

写真２-１は凸形の中房に１＋８＋17の蓮子を二重に配置し、旧衙里遺跡からも同型式軒丸瓦が出土している。写真２-２は蓮弁が短く、凸形の大きい

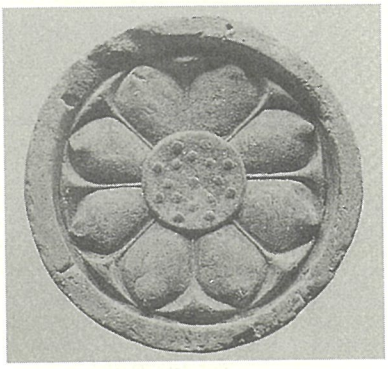
中房に１＋８＋８の蓮子が均等に配置され、他の遺跡では類例をみない。写真２-２について、薛貞連は文献記録に基づき、貞觀初年を武王28年（627）とみて武王代に（薛貞連1975）、亀田修一は文献記録を参考せず、蓮子のあり方から６世紀末～７世紀初頭に（亀田1981）推定した。しかし、貞觀初年が627年に相当するとしても、その年にはすでに修徳寺が創建されていたので、627年は下限年代としか取られない。写真２-１と写真２-２は中房の大きさは異なるものの、蓮子の多数化においては共通し、時期的に近いものと推測される。両者が創建瓦であることを前提にすれば、少なくとも７世紀第一四半期に属するものと考えられる。

以上のように修徳寺は文献に記された数少ない百済寺院の一つであり、当時の伽藍は残されていないものの、現在まで寺院として存続している唯一の寺である。

また、修徳寺の周辺（忠清南道西北地域）は泗沘時代に属する瑞山磨崖三尊仏・泰安磨崖三尊仏・禮山四面石仏が現存し、地方としては最も仏教が盛んだところであるにも関わらず、軒丸瓦は修徳寺でしか出土しない。それはこの地方において修徳寺がいかに重要な位置を占めていたか知る上で注目すべき点である。



1



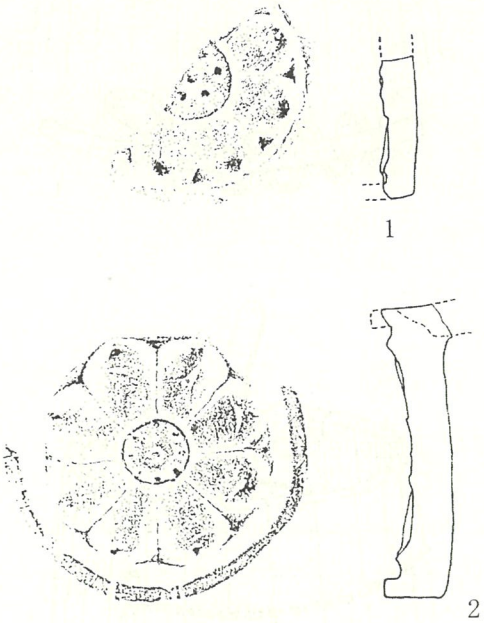
2

写真２　修徳寺の軒丸瓦

（５）その他

青陽郡長坪面の冠峴里瓦窯跡から出土した軒丸瓦（第４図-１）は公州艇止山遺跡と扶餘東南里遺跡と同笵関係をもち、青陽郡木面本義里窯跡から出土した軒丸瓦（第４図-２）は扶餘の陵山里寺跡・旧衙里遺跡・扶蘇山寺跡・官北里遺跡と同笵関係である可能性が指摘されている（清水2003）。両窯跡も往津里窯跡や金徳里窯跡と同様に都城を主な供給先とした窯跡である。

その他、青陽郡長坪面の分香里、論山市連山面の天護里・黄山城、舒川郡麒山面の辛山里、牙山市靈仁面の新雲里、扶安郡上西面甘橋里の遇金山城などからも百済時代の軒丸瓦と思われるものが採集されている。しかし、発掘調査が行われていないので、遺跡の性格や年代はわからない。これらについては今後の発掘調査による資料の増加を待って触れたいと思う。



1

2

第４図　冠峴里瓦窯跡・本義里窯跡（1/4）

Ⅱ．扶安古青林寺跡の軒丸瓦

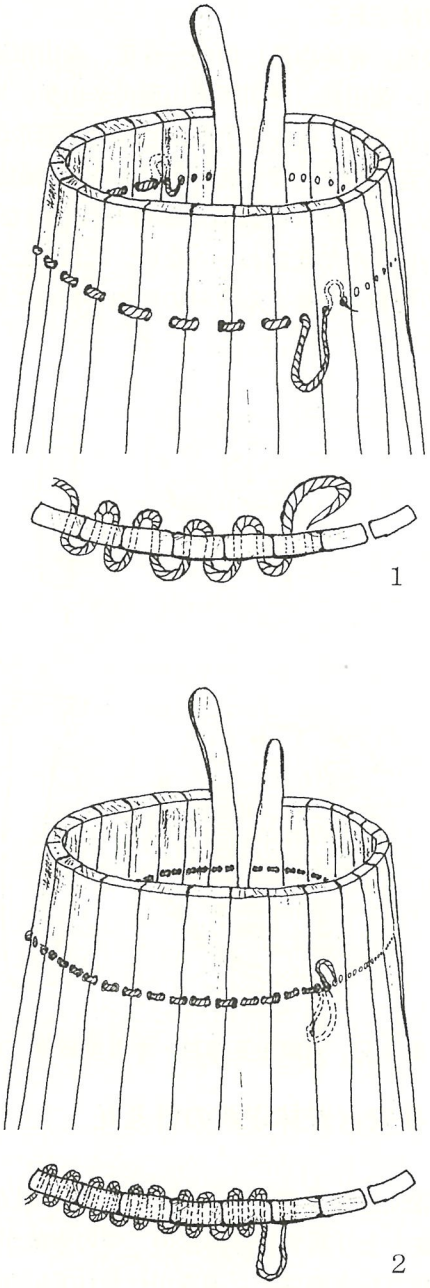
全羅北道扶安郡上西面青林里には、現在、「古青林寺跡」[7]と「新青林寺跡」[8]の二つの寺跡が残っている。新青林寺跡はまだ調査が行われていないが、古青林寺跡は石仏坐像の移転に伴い一部調査が行わ

れ、以下のような瓦が出土した。

（1）軒丸瓦（第7図-1・2・3・4、写真3-1・2・3・4）

調査区域からは3種類の軒丸瓦が出土したが、その中で百済時代に属すると思われる軒丸瓦は次の1種類である。

弁数は百済の典型的な8葉であり、弁端は円形をなしている。凸形の中房には1＋8の蓮子が間弁に沿って均等に配置されている。



第5図　枠板綴じ方模式図

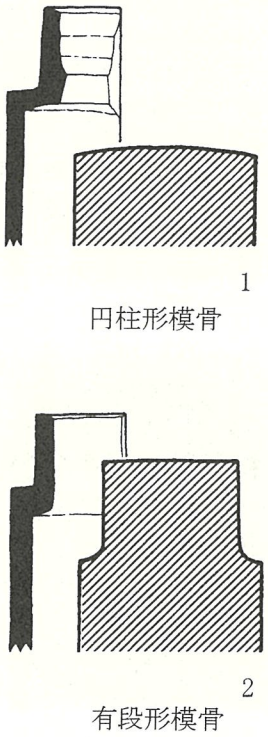
裏面は回転調整による膨らみと一部の同心円文も確認できる。接合技法は接合面に細い刻みを入れて、丸瓦先端の凹面を片ほぞ状にヘラケズリして接合している。

今回の調査で13点の軒丸瓦が出土したが、瓦笵は蓮子の笵傷痕から単一笵が使われたことが推測できる。

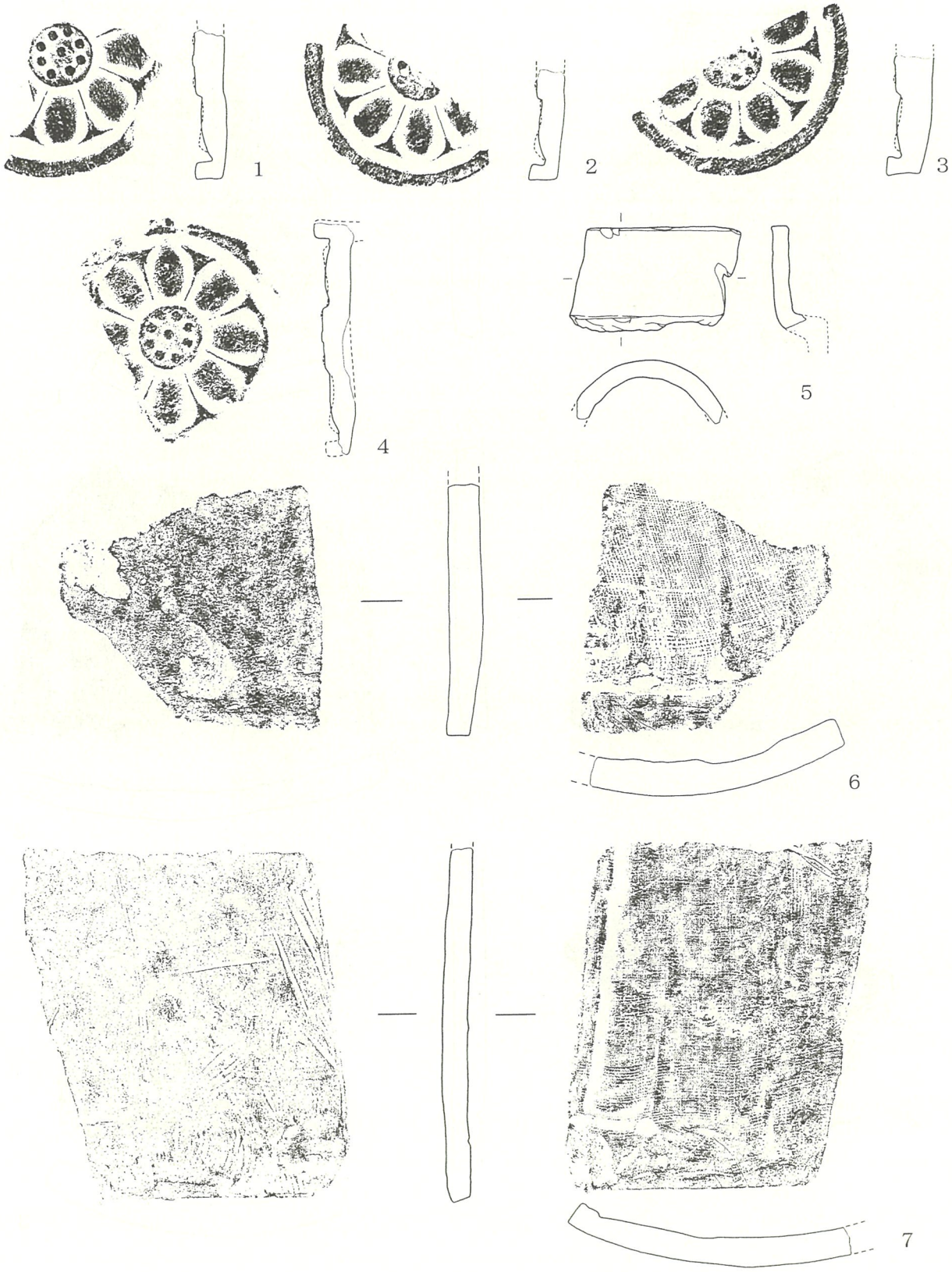
このような弁端が反転せず、装飾文様がない同形式（弁端円形）のものは、古く熊津時代の公山城推定王宮跡をはじめ大通寺跡、泗沘時代の官北里遺跡・金剛寺跡・龍井里寺跡・定林寺跡・佳塔里寺跡・龍井里建物跡などから出土している。

しかし、これらの遺跡から出土する軒丸瓦は弁端が柔らかく隆起する点（公山城推定王宮跡・官北里遺跡）、中房は平坦で圏線によって区画されている点（大通寺跡・金剛寺跡）、蓮子の数や大きさにその差異がみられる点（定林寺跡・佳塔里寺跡・龍井里寺跡など）など、古青林寺跡とは異なり、同笵関係は認められない。

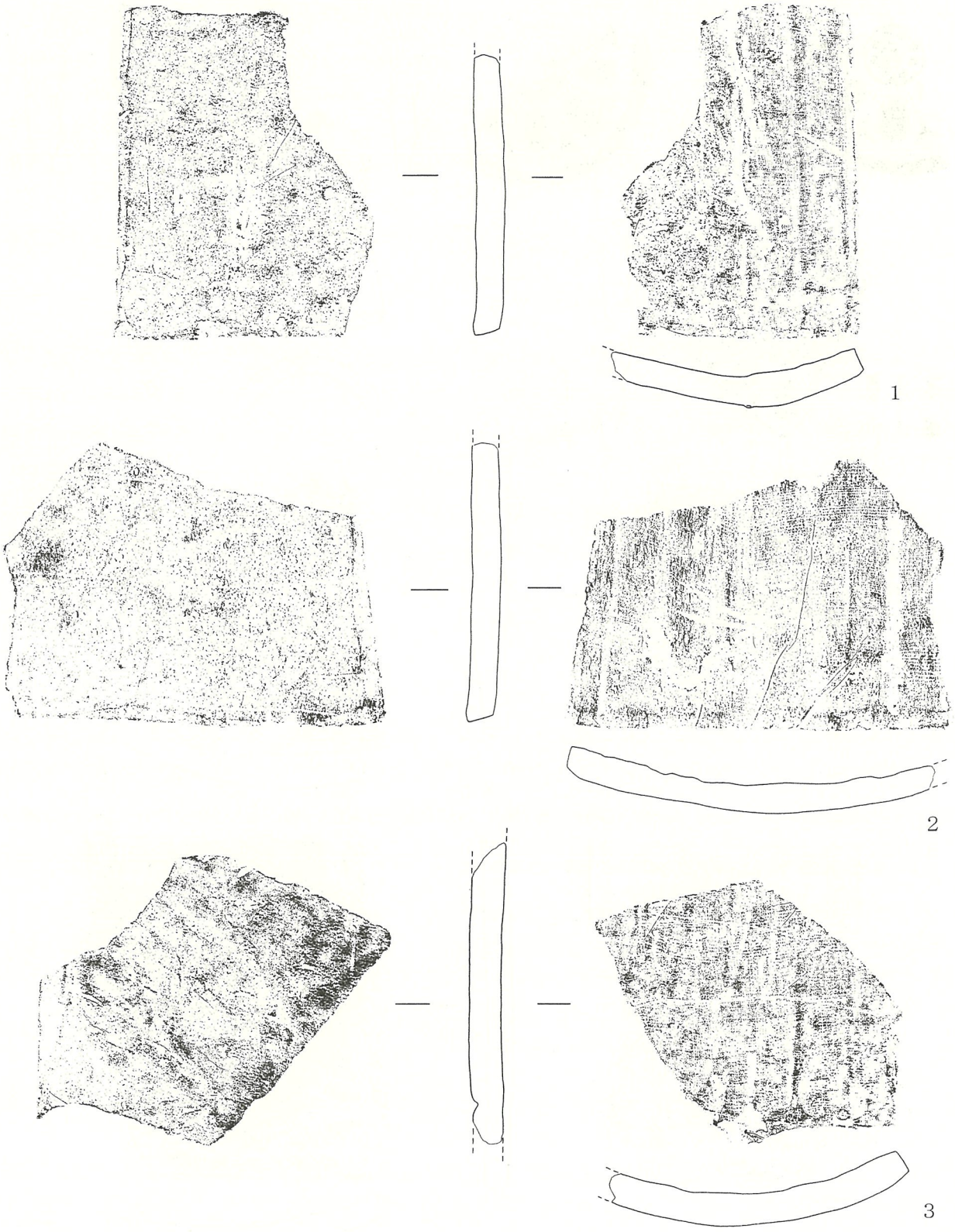
したがって他の遺跡との比較からこの軒丸瓦の年代を決めることは難しい。ただし蓮弁（素弁・円形）・弁数（8弁）・中房（凸形）・蓮子数（1＋8）・周縁（素縁）・裏面（回転調整）・接合技法（接合位置が高い・片ほぞ）など、文様構成や製作技法の諸



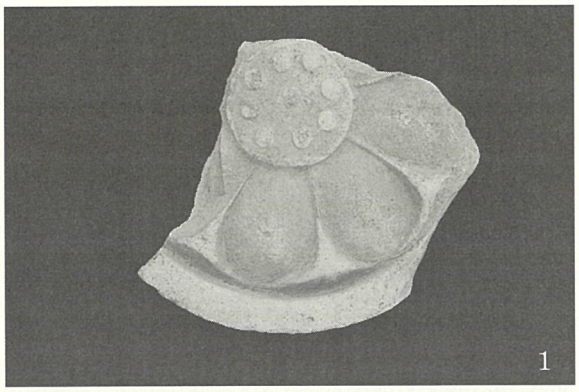
第6図　模骨の模式図

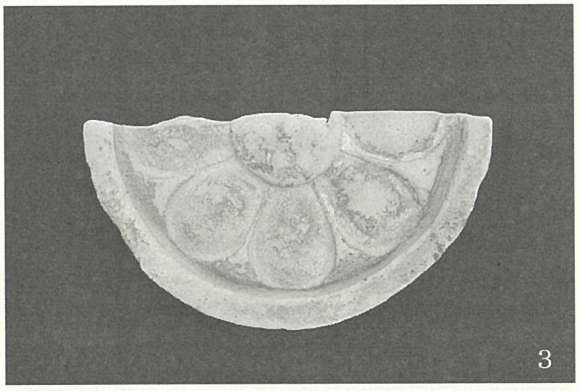


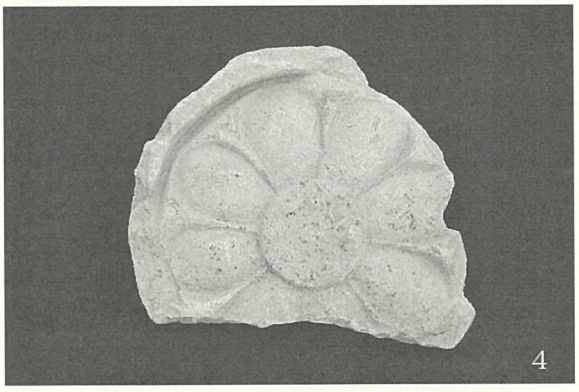
第７図　古青林寺跡の瓦（1/4）

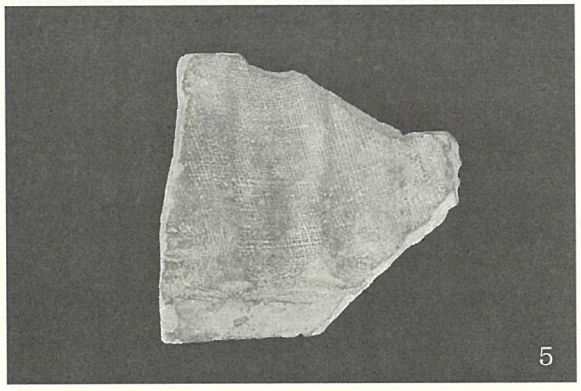


第８図　古青林寺跡の瓦（1/4）









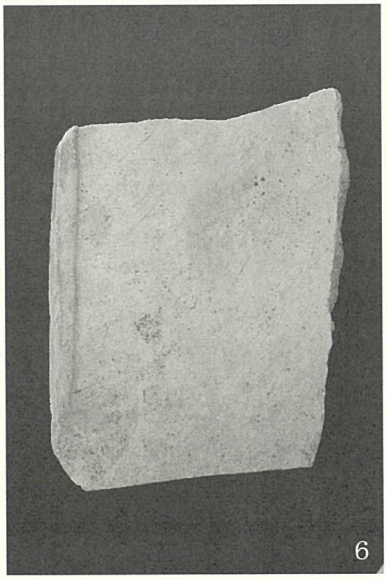


写真３　古青林寺跡の瓦

要素を総合的に考えると百済時代に属することは間違いないと言えよう。

（２）平瓦（第７図-６・７、第８図-１・２・３）

平瓦の凸面の叩き目は横ナデ調整によって消され、ほとんど無文をなしているが、一部に平行叩きが確認できる。

凹面には桶の枠板痕を留めており、枠板の幅はだいたい3.7～5.7cmである。百済で使用された枠板綴じ方は約14～15種類が確認されている（崔孟植1999・李タウン2002b）。

古青林寺跡の平瓦生産に使用された桶の枠板の綴じ方は第５図-１のような１枚の枠板に２つの穴を開けて１本の紐を利用して綴じる最も簡単な方法である（第７図-６、写真３-５）。このような方法は百済で最も多く使用されている。

そして、基本的には第５図-１と同様の方法ではあるが、第５図-２のような１枚の枠板に４つの穴を開けて綴じた可能性のある平瓦も出土している（第７図-７、写真３-６）。このような綴じ方が扶蘇山城と王宮里遺跡からもその類例が知られているが（崔孟植1999）、古青林寺跡では１点しか出土せず、

本稿ではその可能性だけを言及しておきたい。

この遺跡の平瓦の製作に使われた截頭円錐形をなす有柄開閉式桶は主に百済と高句麗で使われたもので、これによって製作された平瓦の凹面には枠板痕を留めている。これに対して統一新羅時代になると円筒形の無柄非開閉式桶が使用されるようになり、これによって作られた平瓦の凹面には枠板痕を留めない。したがって百済地域で出土する平瓦のうち、凹面に枠板痕を留めるものは7世紀第三四半期を下限年代と考えてよいだろう。

そして、これらの平瓦は上述した軒丸瓦と同じ胎土によって作られたことからもそのセット関係が認められる。

（3）丸瓦（第7図-5）

丸瓦は玉縁式が出土した。破片であるために全体の様子はわからないが、凸面は無文であり、玉縁部分の凹面には布目がみられる。そして玉縁の基部と肩の連結部分の凹面の角度は古式にみられる直角に近いものと推測される。

丸瓦の模骨は平瓦の桶とは違って、一木造りである。したがって、その種類も単純で、円柱形（第6図-1）と有段形（第6図-2）に大きくわけられる。行基式丸瓦は当然円柱形模骨が使用されており、製作技法の変化もあまりみられない。それに比べて、玉縁式丸瓦は円柱形模骨と有段形模骨の両方が使用されており、模骨によって製作技法も異なる。

円柱形模骨で玉縁式丸瓦を製作する場合、玉縁は模骨を利用せず、別の粘土で回転を利用しながら作り上げる。これによって造られた丸瓦の胴部の凹面は、布目を留めているのに対して、玉縁部分の凹面には布目を留めない。この技法は艇止山遺跡・舒川金徳里窯跡・旧衙里遺跡・弥勒寺跡などで使用されており、艇止山遺跡との関連から6世紀前半には使われていたことがわかる。

一方、有段形模骨で玉縁式丸瓦を製作する場合、玉縁部分も模骨を利用して製作するので、これによって造られた丸瓦の凹面は全体にわたって布目を留めている。この技法は扶餘の亭岩里窯跡・金剛寺跡・百済烏含寺跡などで使用されており、扶餘亭岩里窯跡との関連から6世紀中頃には使われていたことがわかる。

このように、模骨は円柱形が有段形より古く、有段形は泗沘時代に登場したものである。両者は弥勒寺跡・百済烏含寺跡の年代から少なくとも7世紀第一四半期まではともに使われていたことがわかる。一方、日本では7世紀前半まで円柱形が使われたが、有段形は641年の山田寺から使われるようになる（大脇1991）。百済における円柱形模骨の存続期間を推定するのに参考にすべき事項である。

したがって、古青林寺跡の丸瓦は泗沘時代に属するものとして考えてもよいと思われる。

Ⅲ．考　察

古青林寺跡の瓦は軒丸瓦の文様構成から丸・平瓦の製作技法に至るまで百済時代に属するものとして認めざるを得ない。問題は百済時代の中でのより細かい年代設定とその生産背景である。

古青林寺跡を除く軒丸瓦が出土する地方の遺跡は、百済王が造営主体となって護国寺刹として造営された百済烏含寺跡をはじめ、文献にもその記録がみられ、名僧惠現が在住していた修徳寺、そして扶餘・公州周辺に位置しながら都城内の遺跡と需給関係をもつ往津里窯跡・金徳里窯跡・冠峴里瓦窯跡・本義里窯跡などである。その殆どが泗沘時代に属し、生産遺跡を除けば、百済烏含寺跡と修徳寺は百済（泗沘時代）で重要な位置を占める地方の寺院である。したがって百済における地方の軒丸瓦の生産・使用は主に泗沘時代に入ってから行なわれたと考えられる。

しかし、古青林寺跡は軒丸瓦が出土しているにも関わらず、分布上都城から最も遠く離れた場所に位置し、分布域の南限を示しているにも関わらず、文献には記されていない。

百済時代の丸・平瓦が山城を中心として百済各地から出土しているのに対して、軒丸瓦が出土するのは上記の遺跡に限られることは、軒丸瓦が使用された遺跡は特別な性格をもつ遺跡と考えてよいだろう。したがって、古青林寺跡も百済の歴史の中で地方、特に湖南地方において重要な役割を果たしていたと推測される。

古青林寺跡が位置する扶安には（百済地名は皆火縣・欣良買縣）、武王34年（633）に恵丘が創建したと伝えられる来蘇寺と、武王35年（634）に妙漣が創建したと伝わる開岩寺が現存する。しかし、百済時代の創建を裏付ける根拠はまだ何一つも確認されていない。

扶安が百済の歴史の表に登場するのは「白村江の戦」として代表される百済復興運動が行われた時期（660～663）である。復興運動は「周留城（豆率城・豆良伊城・州柔城）」と、「白村江（白江）」を中心に繰り広げられるが、その位置を比定するにあたって、数多くの説がある。[9)]

しかし、最近、全栄来による長年の研究調査の成果（全栄来1995・2003）から‘周留城＝遇金山城’、‘白江＝東津江’の可能性が高く評価されており、周留城と白江の位置比定について筆者は諸説ある中で、全栄来説を支持したい。

遇金山城は位金岩山城・禹陳古城とも呼ばれ、扶安郡上西面甘橋里に位置する全長3960mの百済では最大級の山城である。東津江は全羅北道南部を北西流する川で、遇金山城と共に古青林寺跡と近接している。

したがって、ここで想像をたくましくすれば、古青林寺跡の軒丸瓦の生産年代と背景は百済復興運動との関連性が浮かび上がってくるのである。

まず、生産年代であるが、湖南地方で本格的な寺院建築が始まったのは武王代（600～641）である。もし古青林寺跡が武王代に創建されたならば、百済滅亡まで少なくとも20年以上存続したことになる。しかし、軒丸瓦は一種類の同一笵によって生産され、また丸・平瓦の製作技法も多様性がみられない。これに加えて武王が造営主体となった益山の弥勒寺跡・帝釈寺跡・王宮里遺跡などの軒丸瓦との関連性がみられないことからも、古青林寺跡が武王代まで遡って数十年も存続していたとは考えにくい。

そうすると、百済最後の義慈王代（641～660）になるが、ここで疑問とされるのはなぜ中央から遠く離れたこの地域に寺院を建てたかという点である。その背景として考えられるのが上述した復興運動である。復興運動の拠点となるこの地方に、国の復興や戦死した兵士などの冥福を祈るための寺院、すなわち百済烏含寺跡のような護国寺刹として建てられたが、復興運動の失敗と共にその機能も短期間で失ったと推測される。

ところが、復興運動が行われた約4年間に、どのくらいの規模の寺院を完成することができたかについては、まだ、全域の発掘調査が行われていないので、詳細はわからないが、中門・塔・金堂・講堂・回廊などをもつ本格的な伽藍をもった寺院として完成されたとは考えられず、伽藍の一部だけが建てられたか、もしくは復興運動の失敗によって途中で造営が中断された可能性も考えられる。それは現在の立地条件や出土瓦の種類からも推測できる。

そして古青林寺跡の瓦を生産した瓦窯はまだ発見されていないが、同笵の軒丸瓦が他地域から出土しないことから在地生産の可能性がある。

おわりに

百済時代の瓦を出土する地方の遺跡は次の三つのタイプに分けられる。[10)]

第1タイプ：軒丸瓦が出土する遺跡。

第2タイプ：軒丸瓦は出土しないが、製作道具として布袋が用いられる遺跡。

第3タイプ：軒丸瓦は出土しないが、製作道具として主に縄袋が用いられる遺跡。

本稿はその中で第1タイプを中心に論を進めてきた。その結果、古青林寺跡は百済復興運動が行なわれた際に護国寺刹として造営されたと推測した。また、軒丸瓦の使用・生産は地方独自に行なわれたと考えるよりも、国家的な造営事業や中央との関連の中から行なわれたと推測した。

最後に、古青林寺跡に関する筆者の見解は周留城・白江の位置比定において全栄来説の支持を前提にしており、また第2タイプと第3タイプについては扱いきれなかった。今後、古青林寺跡の全面発掘調査による資料の増加を期待しながら、これらの問題も含めて紙面を改めて考察したいと思う。

謝辞

古青林寺跡の資料収集にあたっては圓光大学校考古美術史学科の崔完奎先生に、作成にあたっては湖南文化財研究院の李永徳氏、圓光大学校博物館の金癸洙氏、九州大学考古学研究室の田尻義了氏のご協力を頂いた。そして圓光大学校国史教育科の李東宇先生・申圭秀先生・金載名先生よりご教示を頂いた。末尾ながら、感謝の意を表したい。

（圓光大学校師範大学国史教育科）

引用・参考文献

黄壽永　1968「崇岩山聖住寺事跡」『考古美術』第9巻第9号　通巻98号

黄壽永　1981『韓国金石遺文』第3版

洪思俊　1968「百済烏含寺考」『考古美術』第9巻第11号　通巻100号

洪思俊　1969「百済の漆岳寺と烏含寺小考」『百済文化』第3輯
洪思俊　1972「修徳寺旧基と白石寺考」『百済研究』第4輯
朴容塡　1972「百済瓦当の体系的分類―軒丸瓦を中心として―」『百済文化と飛鳥文化』田村圓澄・黄壽永編
薛貞連　1975「百済蓮華紋瓦当編年に関する研究」慶熙大学校大学院碩士学位論文
亀田修一　1981「百済古瓦考」『百済研究』第12輯
圓光大学校馬韓・百済研究所　1984『全羅北道文化財地表調査報告書―扶安郡編―』全羅北道扶安郡
国立公州博物館　1988『百済瓦当特別展』
李道学　1989「泗沘時代百済の4方界山と護國寺刹の成立」『百済研究』第20輯
国立扶餘博物館　1989『特別展　百済の瓦塼』
大脇潔　1991「丸瓦の製作技法」『研究論集』Ⅸ　奈良国立文化財研究所学報第49集
金誠亀　1990「扶餘の百済窯址と出土遺物に関して」『百済研究』第21輯
金誠亀　1991「百済の瓦塼」『百済の彫刻と美術』公州大学校博物館
金鐘萬　1992「舒川金徳里百済窯址」『扶餘亭岩里窯跡』Ⅱ　國立扶餘博物館
井内古文化研究室　1993『朝鮮瓦塼百粋』
全栄来　1995『白村江から大野城まで』新亜出版社
全栄来　2003『全北古代山城調査報告書』韓西古代学研究所
忠南大学校博物館　1998『聖住寺』忠南大学校博物館叢書第17輯
崔孟植　1999『百済ピョンギワ新研究』学研文化社
李タウン　1999a「百済烏含寺跡の造瓦集団」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集
李タウン　1999b「百済の瓦からみた飛鳥時代初期の瓦について」『飛鳥・白鳳の瓦と土器―年代論―』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会
李タウン　2002a「百済の瓦生産―熊津時代・泗沘時代を中心として―」『韓半島考古学論叢』編集代表西谷　正、すずさわ書店
李タウン　2002b「百済と飛鳥時代初期の平瓦製作技法―百済・泗沘時代の桶巻作りを中心として―」『人類史研究』13　人類史研究会
清水昭博　2003「百済「大通寺式」軒丸瓦の成立と展開―中国南朝系造瓦技術の伝播―」『百済研究』第38輯

挿図・写真出典

第2図　李タウン　1999a
写真1　国立扶餘博物館　1989
第3図　金鐘萬　1992
写真2　①国立扶餘博物館　1989、②金鐘萬　1992
第4図　清水昭博　2003
第5図　李タウン　2002b
第6図　大脇潔　1991より引用改変

註

1）百済時代の中央と地方の範囲を明確に決めるには幾つかの問題がある。例えば、考古学的には熊津時代の都である公州には羅城が確認できないので、都城の範囲を決めにくい。また、文献的には地方統治のために設けられた22檐魯や5方の位置比定がまだ明らかにされていない点などである。したがって、本稿では現在の行政区域としてソウル市・扶餘郡・公州市・益山市を除いた地域を地方として仮称したい。
2）百済烏含寺は烏合寺・烏會寺とも呼ばれている。
3）李能和、1918『朝鮮仏教通史』上編の朗慧和尚碑文「易寺榜爲聖住」に「寺舊名烏合寺」という註釈が付けられている（黄壽永1968）。
4）百済烏含寺跡は戦勝した寃魂が仏界に昇ることを祈願する護国寺刹として建てられた。
5）往津里窯跡の報告書は現在出版作業中でもあり、詳しいことについては今後稿を改めて検討したい。
6）現在の修徳寺は韓国最大の宗団である大韓仏教曹溪宗25教区本寺の一つである。
7）古青林寺跡は青林里ソウン村に位置し、「旧青林寺跡」・「青林里寺跡」とも呼ばれている。石仏坐像（地方有形文化財第123号）が残存していたが、最近、扶安郡上西面甘橋里にある開岩寺に移転された。石仏の年代は彫刻手法から高麗時代に推定される。
8）新青林寺跡は青林里青林村に位置し、「青林寺」銘瓦が採集され、「青林寺跡」とも呼ばれている。ソウン村の古青林寺跡の廃寺後、青林村に新しく青林寺を造営したと伝わることで、新青林寺跡として呼んでいる。高麗高宗9年（1222）に製作された銅鐘（宝物第277号）が1850年代に発見され、来蘇寺に移された。現在、南側と東側の石築の一部が残っている。
9）周留城と白江については韓日両国の間で数多くの論考があり、本稿では紙幅の関係もあって詳しく触れないことにする。
10）第1タイプは主に畿内の周辺に位置し、それらの遺跡は国家的な寺院（百済烏含寺跡・古青林寺跡）や寺名が文献に残され、その地方の拠点となる寺院（修徳寺）、都城を供給先とした窯跡（金徳里窯跡・往津里窯跡など）で、製作技法においても中央（畿内）と共通する点が多く、布袋が用いられている。第2タイプは伽藍を持たない単一規模の寺院（四面石佛・禪雲寺東佛菴など）、最大級の山城（雲住山城など）で、軒丸瓦は出土しないものの、布袋が用いられるなど瓦製作技法において畿内の間接的影響がうかがえる。第3タイプは新羅との国境線近くに位置する山城で、瓦製作技法において畿内の影響もあったが、主に縄袋が用いられるなど最終的には在地の土器工人によって生産された。

※This paper was supported by Wonkwang University in 2003。